
研 究 報 告

東日本大震災における赤十字の災害看護の伝承

小林 洋子¹, 前田久美子², 小原真理子³,
大和田恭子⁴, 谷岸 悦子⁵

The Transmission of Disaster Nursing Activities of the Japanese Red Cross Society on the Great East Japan Earthquake

Yoko Kobayashi, Kumiko Maeda, Mariko Ohara,
Kyoko Owada, Etsuko Tanigisi

キーワード：災害看護、災害救援、日本赤十字社、看護師、伝承

key words : disaster nursing, disaster relief, Japanese Red Cross Society, nurses, transmission

Abstract

It is well known around the world that the Red Cross has made an enormous amount of achievements in disaster relief activities. However, the specific performances of the Japanese Red Cross Society (JRCS) nurses have not been clarified in documented form. In the past, they have been handed down to their junior fellows orally. The purpose of this study was to identify the valued matters in the JRCS disaster nursing activities in order to transmit them to future generations. Semistructured interviews were conducted with 22 nurses who had participated in the relief activities in the Great East Japan Earthquake. The interview data were analyzed qualitatively. As a result, the following 4 categories were revealed as core features: 1) always accept requests for disaster relief activities, 2) always care about the patients and victims, 3) band together at the time of disaster, and 4) the victims and the experience in the relief activities mature nurses. In truth, these four are not specific features only in disaster relief activities but also important concepts in normal nursing activities. What has been done in disaster relief activities will be utilized in normal nursing activities and vice versa. It would appear that Categories 2) and 3) fall into line with the JRCS disaster policies in Sanriku Tsunami and with the admonition of Mr. Tsunetami Sano, the founder of the JRCS. Moreover, category 4) was clarified as the crucial aspect of this study.

受付日：2014年12月17日 受理日：2016年2月24日

1. 日本赤十字豊田看護大学 Japanese Red Cross Toyota College of Nursing
2. 元日本赤十字社幹部看護師研修センター Institute for Graduate Nurses Japanese Red Cross Society
3. 日本赤十字看護大学 Japanese Red Cross College of Nursing
4. 日本赤十字社医療センター Japanese Red Cross Medical Center
5. 東京家政大学 Tokyo Kasei University

要 旨

赤十字の災害における救護活動の実績と歴史は、国内外で認められているが、今日まで実践してきた赤十字の災害看護について看護師が伝えてきた事柄は明らかにされていない。東日本大震災の救護活動に従事した看護職22名を対象に、赤十字の災害看護について、後世に伝えていく大切にしてきた事柄を明らかにすることを目的に半構成的面接を行った。面接データは質的に分析した。災害看護において伝えていく大切にしてきた事柄は、【常に、災害救護活動に応える】、【常に、対象を気に掛ける】、【一丸となる】、【災害救護活動、被災者に育てられる】の4つのコアカテゴリーが導き出された。これらは、平常時から災害時を循環する関係であることが示された。また、【常に、対象を気に掛ける】、【一丸となる】は三陸海嘯における赤十字の救護活動方針や佐野常民（日本赤十字社創設者）の訓示を引き継いでいると考えられた。さらに【災害救護活動、被災者に育てられる】は、本研究において大切にしてきた事柄として明らかにされた。

I. はじめに

世界各地で発生する災害は、1970年代に比べ、最近10年では発生件数、被災者数ともに約3倍に増加している（内閣府，2011）。わが国においても、1995年阪神淡路大震災、2004年新潟中越地震、そして2011年3月に発生した東日本大震災と、大規模な災害が発生しており、人々の間に災害救援や防災に関する関心が高まっている。看護の領域では、1995年に発生した阪神淡路大震災以降、日本災害看護学会の設立、日本看護協会による防災・災害ネットワークの構築（南，2005，p.46）などの動きが見られた。一方、人道的任務の達成を目的とする赤十字（日本赤十字社，2014，p.73）は、防災訓練や災害救助の長い歴史をもっており（南，1996，p.85）、大規模で長期に組織化された災害救援を行う（Komnenich, Feller, 1991, p.124）など、災害救援の実績と歴史は、国内外で認められている。しかし、今日まで実践してきた赤十字の災害看護は、実践報告（守屋・藤田，2001）や赤十字の災害看護のあり方、役割に関する報告（竹内・北・芳賀他，2005；Schmidt，2004）であり、赤十字の看護師が救護員として伝えてきたことや、それを議論し検証する報告は見られていない。

わが国の赤十字救護班が活動を始めて間もない1896年に発生した三陸海嘯における救護員の記録から川原（2011，p.49-50）は、赤十字の活動の方針として、1）「委員総長の指揮に従い充分救護をなすべき」2）「本社救護員は動作の中心となれ」3）「早く飛び出し手軽く始末つけ早く引揚げよ」4）「事務は迅速性を欠いてはならない」5）「地方医士に花をもたせよ」6）「看護婦はワザモノと存知候」をまとめている。この記録は、三陸海嘯における救護員である医員による記録であり、救護班の活動を中心にしている。看護師や看護士の活動を評価しているが、看護師自身が伝える内容は、明確にされていない。このことから現在、救護活動を実践している看護職を対象に赤十字の災害看護

で大切にしてきた事柄を探求する。これらを明確にすることは、国内外で赤十字の看護師が災害看護経験の中で培ってきたことを明らかにし、赤十字の災害看護の体系化、そして看護基礎教育をはじめとする災害看護教育や災害時、平常時の災害看護活動に示唆がえられるものと考えられる。

II. 研究目的

東日本大震災における赤十字の災害看護を経験した看護職が後世に伝えていく大切にしてきた事柄を明らかにする。

III. 用語の定義

赤十字の災害看護：赤十字施設に所属する看護職により培われてきた赤十字の原則を基盤にした災害サイクルにおける看護ケアであり、被災地内の看護職による活動と被災地に派遣された看護職による活動を含む。

伝承：世代的伝達（綾部・桑山，2006，p.198）とされる。本研究では赤十字施設に所属する看護職が災害看護に関して大切に考えている事柄（知識、スキル、信念など）を受け継ぎ、伝えることである。

IV. 研究方法

A. 研究デザイン

本研究は、赤十字の災害看護の経験から看護職が大切にしてきた事柄を明らかにするため、質的記述的研究デザインを用いた。

B. 研究参加者と選定方法

研究参加者は、被災地域の赤十字病院に所属し、東日本大震災の発生から3週間の間（3月11日～3月31日）に災害看護活動に従事した看護職である。

研究参加者の選定は、被災地域にある赤十字病院の看護部長に研究参加者公募の承諾を得た後、公募に応

募し研究参加に同意した者とした。

C. データ収集方法

データ収集は、2011年11月から12月まで半構成的面接法を用いて実施した。インタビュー内容は特徴的な赤十字の災害看護、後世に伝えていきたい赤十字の災害看護である。

まず、被災地域の赤十字病院の看護部長に研究の協力を依頼し、承諾の得られた施設に研究参加者募集のポスターを送付し、掲示を依頼した。ポスターに掲載された連絡先に自身で連絡をした応募者に口頭で研究概要を説明し研究協力への同意を得た。その後、インタビュー日時とプライバシーを保ち面接できる場所を調整した。

次にインタビューガイドを用いて90分程度の面接を行い、その際、研究参加者の許可を得てインタビュー内容をICレコーダーに録音した。

インタビューは、まず研究参加者に被災へのお見舞いと災害看護活動への労いを伝え、携わった東日本大震災の救護活動を語ってもらった。次にその活動において「特徴的な赤十字の災害看護はどのようなことか」を尋ねた。続いて「これまで参加した赤十字の救護活動で、特徴的な赤十字の災害看護はどのようなことか」、「後世に伝えていきたい赤十字の災害看護はどのようなことか」を尋ねた。

インタビューでは、研究参加者が自由に語る事ができるように研究参加者の語りを維持し誘導しないように配慮した。また、救護活動経験の想起から生じる研究参加者の心身の不調を確認しながらインタビューをすすめた。

D. データ分析方法

ICレコーダーに録音したインタビュー内容を逐語録にし、特徴的な赤十字の災害看護、災害看護経験の中で大切にしたい事柄に関する語りを文脈単位で抽出し、意味の特性を推論しコード化を行った。次にコードの意味の類似性に着目し、共通するコードをサブカテゴリーとしてまとめた。さらにサブカテゴリーの意味の共通性から抽象度をあげカテゴリーにまとめ、カテゴリーの意味を検討し、コアカテゴリーを導き出した。その際、コード、サブカテゴリー、カテゴリー、コアカテゴリーは、研究参加者の語りを大切にしながら抽象化することを心がけた。最後に、カテゴリー、コアカテゴリー間の関連を検討し図式化した。

なお、データの分析・解釈は、共同研究者間で検討しながらすすめた。

E. 倫理的配慮

研究参加者が、被災地の病院に所属し救護活動に従事した看護職であることから、研究参加の依頼には、文部科学省研究振興局ライフサイエンス課および厚生労働省大臣官房厚生科学課からの通達に則り、前もって当該施設に研究の概要を説明し、施設において行わ

れている調査・研究状況を把握し実施した。インタビューにあたり、まず研究参加者に、研究への参加と中断は自由であり、参加・中断による不利益はない、インタビュー内容は本研究の目的以外に使用せずデータは記号化し分析する、研究資料は研究者と共同研究者が扱い、厳重に保管し研究終了後全て破棄する、研究結果の公表は、プライバシーの保守と匿名性を厳守する。以上について口頭と書面で説明し、書面で同意を得た。次に研究参加者が救護活動後の看護職であることから、心理的負担を配慮しながらインタビューを行うよう留意した。

なお、本研究は、平成2011年度日本赤十字社幹部看護師研修センター研究倫理審査委員会の承認を得た。

V. 結果

A. 研究参加者の概要

研究参加者は、22名である。看護管理者が19名（看護副部長2名、看護師長13名、看護係長4名）、スタッフ看護師3名であり、女性は21名、男性は1名（スタッフ看護師）と看護管理者、女性が多数である。年齢は50代から30代であり、40代以上が20名と90%以上を占めている。また、研究参加者のうち19名は災害救護の経験を有し、3名は東日本大震災の救護活動が初めての救護活動経験である。

B. 伝えていく大切にしてきた赤十字の災害看護

半構成的面接は、平均60分である。面接の逐語録から抽出された特徴的な赤十字の災害看護、および後世に伝えていきたい赤十字の災害看護に関する記述は、264件である。これらは、コード108件、サブカテゴリー25件、カテゴリー8件にまとめられた。さらに【常に、災害救護活動に応える】、【常に、対象を気に掛ける】、【一丸となる】、【災害救護活動、被災者に育てられる】のコアカテゴリー4件が導き出された（表1）。以下、コアカテゴリーを【 】、カテゴリーを《 》、サブカテゴリーを〈 〉、具体的記述を「 」で示す。なお、具体的な記述では、意味を明確にするために補足内容を（ ）で示す。

1. 常に、災害救護活動に応える

【常に、災害救護活動に応える】には、《災害救護、救護員に専心する》、《災害時も平常時も状況に柔軟に対応できる》という2つのカテゴリーがある。看護職は災害に関わる救護員の心構えをもち、災害の場面では、救護班、救護員として柔軟な対応をする。この柔軟な対応は、平常時と共通する。

a. 災害救護活動、救護員に専心する

《災害救護活動、救護員に専心する》は、「経験も訓練も受けているので被災時から必ず行かなければならないと思った」や「赤十字の看護師は助けが必要な人がいると、とにかく体が動いてしまう」というように

表1. 伝えていく大切にしてきた赤十字の災害看護

コアカテゴリー	カテゴリー	サブカテゴリー
常に、災害救護活動に応える	災害救護活動、救護員に専心する	救護員として災害救護要請に必ず応える 救護員として自らの行動を律する
	災害時も平常時も状況に柔軟に対応できる	災害時も平常時も状況に応じて柔軟にケアできる 救護班はどのような状況にも応じることができる
常に、対象を気に掛ける	対象を気遣う普段の看護が災害救護活動に繋がる	患者に寄り添った普段の医療・看護の連続線上に救護活動がある 普段から救護活動の情報や体験に触れられる 教育、研修を通して対象を気遣い、考えて救護することを学ぶ
	被災地、被災者を気遣いながら救護活動をする	地元を立て、被災地の復興を見据えて、救護活動をする 被災地の負担や被災者の気持ちを汲み、救護活動をする 被災地の全ての人を対象にしたこころのケアを実践する
一丸となる	平常時と切り替える	平常時の看護と発想を変えて対応する 既存の組織を超えた協力体制で取り組む
	組織ぐるみで救護活動を支える	あらゆる災害に長期に継続して救護活動ができる 救護活動に関わる組織要員すべてを支援する 後方支援の看護者は救護員を理解し、支える 支部職員が救護班を支える
	それぞれの役割を自覚し救護活動をする	救護員、後方支援スタッフは役割にそった行動がとれる 看護師長はメンバーの協働を促進する 救護員同士、信頼して協力できる
		責任を持ってやるべきことをする気持ちで臨む 赤十字に対する信頼、期待を実感する 救護活動を通して被災者を理解し救護活動への姿勢を学ぶ 赤十字への信頼、期待に鼓舞される
災害救護活動、被災者に育てられる	災害救護経験、被災者に育てられる	

災害発生時に看護職は、〈救護員として災害救護要請に必ず応える〉ことである。さらに、看護職は、救護員として「救護班の出勤に備え、他者に失礼にならないように睡眠をとり体調管理をする」ことや、平常時には「災害救護活動の話聞けば、自分自身のことは自分です。他者に迷惑をかけるわけにはいかない」と考え、「いつでも救護活動の態勢がとれるように自分を磨き、備品などに関心をもつ」ことで〈救護員として自らの行動を律する〉ことを実践している。

b. 災害時も平常時も状況に柔軟に対応できる

【常に、災害救護活動に応える】ために災害救護、救護員に専心した看護職は、災害現場で「被災者が今できるケアを工夫して指導する」。平常時には「日常の看護の中で臨機応変、創意工夫していくことで急な場でも実践できる。それを後輩たちにもやってほしいので見せたり、話をする」ことを行っている。また、「あるものでいかに工夫するか、研修で先人の知恵を教えられた」というように〈災害時も平常時も状況に応じて柔軟にケアできる〉ことを伝え、伝えられている。同様に、〈救護班はどのような状況にも応じることができる〉は、「赤十字救護班は医師、看護師、主事とチームが整っているの、被災者の状況に合わせて対応できる」ことである。このような状況に応じた柔軟な対応は「状況に応じて変えながら、合わせてやっていくのは災害救護も病院看護も一緒」と看護職は、とらえている。

2. 常に、対象を気に掛ける

【常に、対象を気に掛ける】は、平常時と災害時の事柄である。平常時の看護活動は、常に対象を気に掛けケアを行う。これは、災害救護活動も同様であり、平常時の看護に対象を気遣えなければ、災害時には被

災者を気遣えない。つまり《対象を気遣う普段の看護が災害救護活動に繋がる》は、平常時の看護活動を災害時の看護を視野に入れた活動と位置づけている。実際、災害時には、対象を気に掛け《被災地、被災者を気遣いながら救護活動をする》。

a. 対象を気遣う普段の看護が災害救護活動に繋がる

《対象を気遣う普段の看護が災害救護活動に繋がる》は、常に対象への気遣いが看護には必要であるとする事柄である。「(普段)患者のニーズを考えたケアを実践していると、場面を切り替え災害時に自分たちの活動が考えられる」というように〈患者に寄り添った普段の医療・看護の連続線上に救護活動がある〉。このとらえ方は、「普段からいろいろなところで災害時にこころのケアが必要と言われている」など〈普段から救護活動の報告や体験に触れられる〉という所属組織の環境や、「教育を受けて、赤十字の看護師は配慮して、ご遺体に関われる」など〈教育、研修を通して対象を気遣い、考えて救護することを学ぶ〉ように、災害に備える機会を通して看護職に伝えられる。

b. 被災地、被災者を気遣いながら救護活動をする

《被災地、被災者を気遣いながら救護活動をする》は、平常時に《対象を気遣う普段の看護が災害救護活動に繋がる》というとらえ方に続く災害時の被災地、被災者に対する具体的な気遣いである。まず、「点ではなく線で、被災者の今後という視点で関わってほしい」ことや「今後、地元の人(自身)が継続してケアしていくことを想定し、市職員と遺族対応の役割を決めた」ように〈地元を立て、被災地の復興を見据えて、救護活動をする〉。このことは、災害の過程を視野に、被災地や被災者の今後を見据え長期の展望に立った気

遣いである。また、「被災者の気持ちを考えて行動しないと押しつけがましい救護になる」と考え、「被災者に耳を傾け、体に触れることを、意識してケアや処置をしている」。さらに「復興期に避難を続ける被災者に赤十字救護班が引き継ぎながら支援しても、切り離すのではなく守られているという対応ができた」という〈被災地の負担や被災者の気持ちを汲み、救護活動する〉ことは、災害の場における個々の被災者に対する具体的な気遣いである。このような気遣いは「赤十字のこころのケアは被災地にいるすべての人が対象であることを念頭にケアした」という〈被災地の全ての人を対象にしたこころのケアを実践する〉ことが基盤にある。

3. 一丸となる

【一丸となる】は、《平常時と切り替える》、《組織ぐるみで救護活動を支える》、《それぞれの役割を自覚して救護活動をする》という災害発生時の事柄である。この3つのカテゴリーは、災害発生時に災害救護活動の態勢に発想や体制を《平常時と切り替える》。そして、《組織ぐるみで救護活動を支える》こと、所属組織の後方支援者、救護員が《それぞれの役割を自覚して救護活動をする》。災害発生後、切り替えることで救護活動のしくみと所属する成員の自覚と行動が統合され、【一丸となる】ことができる。

a. 平常時と切り替える

《平常時と切り替える》は、「災害救護では、トリアージなど大事にしたいけれどもできない厳しい状況も頭に入れておかないといけない」とことや「赤十字の災害看護は、病院のやり方から切り替えて、被災者がそこで続けられる方法を考えながら実施し、伝えながらやってきた」というように〈平常時の看護と発想を変えて対応する〉。切り替えは救護体制も同様である。「災害救護では赤十字だけで解決できない問題がある」とことや、こころのケア活動では「急性期に救護班に同行し、こころのケア活動ができる組織編成が必要」と組織全体、あるいは看護ケア提供に際し〈既存の組織を超えた協力体制で取り組む〉ことが必要になる。災害救護活動は、一つの組織や固定した体制で完結するものではなく「災害救護は赤十字だけでなく、他とコミュニケーションよくやっていければいい」というように〈既存の組織を超えた協力体制で取り組む〉ことが必要になる。

b. 組織ぐるみで救護活動を支える

《組織ぐるみで救護活動を支える》は、「赤十字は一式救護備品をそろえ、救護班としてある程度の活動ができる」とことや「救護班はいろいろな問題を継続して対応できる組織の大きさがある」という〈あらゆる災害に長期に継続して救護活動ができる〉赤十字の組織特性である。その組織は「赤十字は救護活動に関わるすべての人をフォローしていこうと考えている」という〈救護活動に関わる組織成員すべてを支援する〉方

針を有している。したがって、救護に従事した看護職が「救護員の労を労い癒してくれたことを忘れない」という思いでいる」ことから看護職を送り出した〈後方支援の看護者は救護員を理解し、支える〉ことで《組織ぐるみで救護活動を支える》一端を担っている。また、「医療活動に専念してもらうようにと支部職員が温かい食事を準備してくれ、ありがたかった」と看護職がいうように〈支部職員が救護班を支える〉こともその一端である。

c. それぞれの役割を自覚して救護活動をする

《それぞれの役割を自覚して救護活動をする》は、救護班派遣前に「病棟スタッフは、救護員派遣に伴う急な勤務変更にも協力してくれた」とことや、「必ず出勤することになると、1班の看護師長を中心に他の看護師長らが資材準備に協力する」ことから〈救護員、後方支援スタッフは役割にそった行動がとれる〉ことである。救護班の看護師長には、「救護活動で協働することは重要なので、救護班師長はうまく協働していく力をもつこと」という〈看護師長はメンバーの協働を促進する〉役割が期待される。救護員である看護職も、「赤十字マークを付けた知らない顔のスタッフのやり取りにも安心する」ことから〈救護員同士、信頼して協力できる〉。そして「救護班として支援するという大きな枠組みの中で、今やるべきことを行うことを教わった」というように〈責任を持ってやるべきことをする気持ちで臨む〉ことが示されている。このように【一丸となる】は、平常時と切り替え災害救護の組織体制と支援、そして救護に直接・間接に関わる看護職ははじめ組織成員それぞれが、自身の役割を自覚し救護活動に一丸となって臨む事柄である。

4. 災害救護活動、被災者に育てられる

【災害救護活動、被災者に育てられる】は、救護活動を経験し、被災者からもたらされる赤十字、救護員への反応を知覚する。そして救護活動に真摯に向かい合う姿勢を獲得していく事柄である。看護職は「被災者がいつも受け入れてくれる感触がある」ことに接し〈赤十字に対する信頼、期待を実感する〉。また、「他の被災者を気遣える被災者からどんな状況下でも人間としての命の尊さと尊厳を教わった」とことや、「被災者が体調管理に気を配れないほど日々精一杯であることを考えた」ことから看護職は、救護の対象者に気づき、「相手がいて、自分は看護の場を提供されているという考えに軌道修正できた」と〈救護活動を通して被災者を理解し、救護活動への姿勢を学ぶ〉ことができた。ここから「達成感、感謝の言葉が報酬となりまた役立ちたい、機会があればいきたい」と考え、「赤十字のナースは最後まで助けてくれるという信頼のベースを失わないようにしたい」と〈赤十字への信頼、期待に鼓舞される〉。このコアカテゴリーは災害救護経験を通し得られている。これにより看護職は救護活

動の能力を高め、次の活動に繋げていく。

5. 伝えていく赤十字の災害看護、コアカテゴリー間の関係

赤十字の災害看護は、平常時、災害時、そして災害救護活動の経験・気づきから再び平常時に災害救護活動に備え、災害発生時には、組織の一員としてそれぞれの役割に応える循環する関係である(図1)。つまり、【常に、災害救護活動に応える】と【常に、対象を気に掛ける】は平常時から災害時に共通した基盤となっている。このコアカテゴリーを基盤として、災害発生を機に【一丸となる】は、災害発生直後、平常時の体制から災害救護体制に一齐に切り替わり、組織、個々の組織成員がそれぞれの災害時の役割で行動する。その結果、災害救護活動を経験し、これまでの赤十字の災害救護活動に対する被災者からの反応を得ることで、【災害救護活動、被災者に育てられる】に繋がる。さらに災害救護の経験から鼓舞された看護職は、災害救護活動への意志を強くし、再び平常時に【常に、災害救護活動に応える】と【常に、対象を気に掛ける】に応じていく関係である。

VI. 考察

A. 平常時の看護と災害時の看護の連続性

赤十字の災害看護として大切にしてきた事柄は、平常時の看護と共通する内容と災害時に特化した内容が

導き出された。平常時の看護と共通する内容は、《災害時も平常時も状況に応じて柔軟に対応できる》、《対象を気遣う普段の看護が災害救護活動に繋がる》である。これは、赤十字の災害看護に従事する看護職は、「状況に応じて変えながら、合わせてやっていくのは災害救護も病院看護も一緒」と、災害看護が災害時に特化した看護というとならえ方をしていない。平常時の看護実践が災害時に活かされる、同じであると考え、普段から災害時の看護を想定した発想をもっている。したがって、「看護は、救護に役立つものなので、日頃から患者の心に寄り添うこと、状況を予測し助けること」から対象に注意を向け、気に掛け、ケアすることは災害時に被災者にも同じようにする。また「継続して家族ができるケアを教える」ことは、物資が不十分な環境で、被災者が自身で継続できる方法を柔軟に考えた対応である。このような考えや対応の根底には、被災者、被災地域を尊重する三陸海嘯における救護活動方針「地方医士に花をもたせよ」(川原, 2011, p.49-50) や、濃尾地震に派遣される看護師に佐野常民が行った訓示「至誠以テ救護ニ従事スヘキ事」(吉川, 2001, p.148) を繋いでいるのであろう。

一方、赤十字の災害看護として災害時に特化した内容は、【一丸となる】である。中でも《平常時と切り替える》は、〈平常時の看護と発想を変えて対応する〉、〈既存の組織を超えた協力体制で取り組む〉ことで、看護と体制を平常時から災害時の体制に切り替え

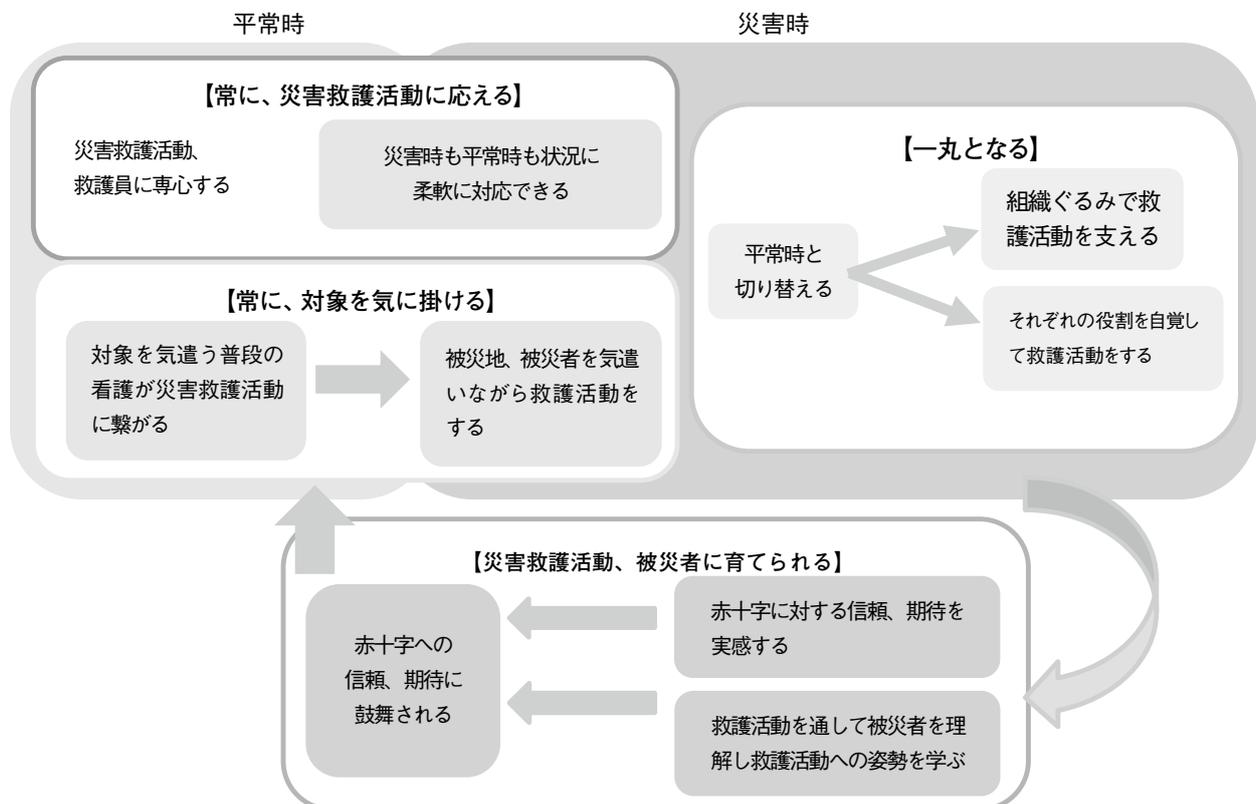


図1. 伝えていく大切にしてきた赤十字の災害看護

ている。このことは、迅速な救護や早く治療を開始するという三陸海嘯における救護活動方針「早く飛び出し手軽く始末つけ早く引揚げよ」(川原, 2011, p.50)と類似すると考えられる。

また、やはり災害は破壊現象(広瀬, 2004, p.28)であり、平常時とは異なる側面をもっている。「災害救護では、トリアージなど大事にしたくてもできない厳しい状況も頭に入れておかないといけない」と、平常時には経験しない状況に遭遇する。平常時と切り替えることは、佐野の訓示「奮勉以テ艱苦ニ堪ヘキ事」(吉川, 2001, p.148)にあるように救護員である看護職には、このような状況にも不撓不屈の精神で対応することが求められていると考える。

B. 蓄積された災害救護活動への評価

災害時の看護は、被災者からの反応を通して看護職自身が災害救護活動にさらに動機づけられてもいる。「赤十字の救護班に、来てくれてありがとうという被災者の反応が強い」ことを経験し〈赤十字に対する信頼、期待を実感する〉。わが国で赤十字は、1888年に救護活動を開始し、濃尾大地震では、看護師が救護に加わり(吉川, 2001, p.168)、今日まで幾多の災害救護活動に従事している。このことは、長期にわたる赤十字の看護職らの災害救護活動に対する被災者や社会の人々の評価であろう。研究参加者も「他者からの赤十字に対する安心の表現は先輩や仲間の活動に対する評価」と述べるように、これまでの救護活動の蓄積が今、被災者から看護職に注がれ、感謝となって表現されている。救護員として看護職は、被災者に関わり「他の被災者を気遣える被災者から、どのような状況下でも人間としての命の尊さと尊厳を教わった」ように災害救護経験から人間の在り方、真の被災者の姿を学びとっている。先人の活動に対する評価や、自身の災害救護経験を通じた学びは、「達成感、感謝の言葉が報酬になりまた役立ちたい、機会があれば行きたい」と思い、「赤十字のナースは最後まで助けてくれるという信頼のベースを失わないようにしたい」と災害救護に向かう姿勢を高めることに繋がると考える。

VII. 結論

東日本大震災の救護活動に従事した看護職が赤十字の災害看護について、後世に伝えていく大切にしてきた事柄を明らかにするため、半構成的インタビューを実施した。その結果【常に、災害救護活動に応える】、【常に、対象を気に掛ける】、【一丸となる】、【災害救護活動、被災者に育てられる】の4つのコアカテゴリーが導き出され、これらは平常時と災害時を循環する関係であった。対象を気遣うこと、平常時と切り替えることは、三陸海嘯の救護活動方針、佐野常民の

訓示と類似しており、引き継いできた事柄と考えられる。さらに本研究では、平常時と災害時の看護の連続性、および被災者からの災害救護活動への評価を大切にしていることが明らかにされた。

謝辞

本研究にご協力いただきました被災地域にある赤十字病院の看護部長の皆様、研究参加者の皆様に心より感謝いたします。

なお、本研究は、学校法人日本赤十字学園平成23年度赤十字と看護・介護に関する研究助成を受けて実施しました。

文献

- 綾部恒雄・桑山敬己編(2006). よくわかる文化人類学. 京都: ミネルヴァ書房.
- 広瀬弘忠(2005). 人間はなぜ逃げおくれるのか 災害の心理学. 東京: 集英社(集英社新書).
- 川原由佳里(2011). 1986(明治29)年明治三陸海嘯における日本赤十字社の救護活動-岩手県における医療救護に焦点をあてて-. 日本看護歴史学会誌, 24/MAR, 37-54.
- Kommenich P., Feller C. (1991). chapter6 Disaster Nursing. Annual Review of Nursing Research, 9, 123-134.
- 南裕子(1996). 災害看護学体系化のすすめ. 看護, 48(5), 84-88.
- 南裕子(2005). [講演] 職能団体としての日本看護協会(JNA)の災害看護活動実績. 看護, 57(10), 46-49.
- 守屋博子・藤田けい子(2001). 茨城県東海村臨界事故における救護活動. 日本災害看護学会誌, 3(2), 44.
- 内閣府(2011). 防災情報のページ 世界の自然災害の状況. <http://www.bousai.go.jp/kyouryoku/world.html> (2011年9月26日閲覧).
- 日本赤十字社(2014). 赤十字のしくみと活動 平成26年度版. 日本赤十字社.
- Schmidt CK. (2004). American Red Cross Nursing :Essential to Disaster Relief. American Journal of Nursing, 4(8), 35-38.
- 竹内幸枝・北道子・芳賀久美代・会沢紀子・杉浦稜子(2005). 第5回日本赤十字看護学会学術集会テーマセッションI 救護員としての赤十字看護師のめざすもの. 日本赤十字看護学会誌, 5(1), 19-25.
- 吉川龍子(2001). 日赤の創始者 佐野常民. 東京: 吉川弘文館.